



ICT 海外ボランティア会会報 No. 92

2020年6月1日(月)

URL: <https://ictov.jimdo.com>

EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿

NTT 西日本 国際室の活動

NTT 西日本 技術革新部 国際室長
当会顧問 坂井 宣之氏

◆特別寄稿

徒然日記(9)

当会特別顧問 石井 孝氏

◆JICA の動き

JICA 海外協力隊募集状況

事務局

◆海外実践マネジメント

今も継続・拡大するフィリピンの Smart・PLDT プロジェクト(16)

元 PLDT チーフオペレーティングアドバイザー

元 NTT アメリカ社長

現(株)ハイホーCEO 鈴木 武人氏

◆海外グラフィティ

現金に始まり現金に終わる、吉村昭と俳句の位置づけ、原三溪(さんけい)
と俳句

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智氏

◆海外便り

コートダジュール・リヴィエラ俳柳紀行(1)

元 JICA シニア海外ボランティア 北垣 勝之氏

◆第1回海外情報ウェブサロン模様

事務局

特別寄稿

NTT 西日本 国際室の活動

当会顧問

NTT 西日本 技術革新部
国際室長 坂井 宣之

ICT 海外ボランティア会の皆様、NTT 西日本 国際室の坂井宣之です。この度、会報へ寄稿する機会をいただき、誠にありがとうございます。NTT 西日本 国際室の活動をご紹介します。



はじめに

NTT 西日本グループは、社会を取り巻く環境変化がもたらす様々な課題に対し、先頭に立って ICT の力で解決をしていく「ソーシャル ICT パイオニア」をめざし、地域から愛され、信頼される企業として変革し続けるとともに、地域を元気にしていく「ビタミン」のような役割を担っています。

ICT 分野では、情報技術の急速な進展に伴いグローバルな視野に立った事業の展開が不可欠になっています。NTT 西日本においても、これまで国内で培った FTTH サービスに関連するノウハウを活用した事業機会の創出、および NTT 西日本グループ各社の新領域ビジネスにおける海外展開に取り組んでいます。

各国との活動

NTT 西日本では、韓国の手通信会社である LG Uplus 社への研修提供及び技術交流を中心とした活動を実施しています。2018 年の交流開始から、つくばフォーラム視察、マイスターズカップ視察などの交流を通じ、2019 年には FTTH 業務改善研修を提供しました。

NTT 西日本の FTTH 関連ノウハウを提供することで、課題解決への気付きを支援し、当該キャリア自身で業務改善に繋げてもらうための研修であり、6 月からおよそ月 1 回のペースで実施し、あわせて 60 名の受講者に参加して頂きました。

上記研修を通じた良好な関係のもと、韓国を訪問し、設備見学、NW 通信競技大会の視察、設備系社員とのディスカッションなど、リレーションを深めています。NTT 西日本 OB の藤井様が LG Uplus 社の執行役員に就任されており、NTT-OB の力をお借りしながら進めています。今後は FTTH 以外の分野でのビジネス連携などリレーションの広がりにも期待ができます。

新領域ビジネスにおける海外展開

NTT 西日本では、FTTH サービスに関連した取り組みに加え、グループ各社による海外展開にも取り組んでいます。

NTT ソルマーレ社は、スマートフォンを通じたコンテンツ、エンターテインメントサービスの領域で多くのお客様のご支持をいただいています。グローバルに拡大するスマートフォンアプリ市場において、米国、韓国、台湾など、ゲーム事業やノベル事業も展開しています。

ジャパン・インフラ・ウェイマーク社は、NTT 西日本グループで培ったインフラ点検ノウハウを強みとして、老朽化が進む日本全国のインフラ点検・保守業務の効率化という社会課題に取り組んでいます。更に、海外のパートナーと協業し、日本国内だけでなく、東南アジアへも点検サービスを拡大してまいります。

国際協力活動

NTT 西日本では、各国の情報通信分野の発展に貢献するため、研修生を受け入れ、技術研修を行っています。2016年より継続して、APT (Asia-Pacific Telecommunity)より、太平洋地域の電気通信事業者からの研修生を受け入れています。

2019年で4回目を数える研修には、ブータン、キリバス、モンゴル、ネパール、パキスタン、スリランカ、タイ、トンガの8か国から、エンジニアを中心にIPネットワークの構築／保守に従事する受講生11名が参加しました。研修では、設備設計や保守等の業務紹介のほか、とう道の見学やケーブル接続実習等、現場での体験を通じた幅広い研修プログラムを実施しています。

人材育成

NTT 西日本では、グローバルスタンダードなスキルを持ち、新たな価値を生み出すことができる人材を育成するため、海外案件での実践の場の提供に加え、グローバル人材育成研修を2011年から実施しています。これまでに600名以上の社員が参加しています。

受講した社員からは、「研修を通して切磋琢磨できる仲間ができた」、「業務内外で外国人と話す場面でも臆せず話せるようになった」など成長できたといった感想が多く寄せられています。

海外に限らず国内においても、さまざまなパートナー企業と如何に価値を共創していくかが重要となります。個の能力・スキルを基盤として、異文化とのコミュニケーションを通じ、影響を及ぼせる人材の育成に取り組んでいます。

最後に

ICT分野ではパラダイムシフトなど変化が激しく、NTTの事業内容も時代とともに、電話からICTへと大きく変わってきました。そのような中でも、どんなときでも「つなぐ」という使命は変わりません。「つなぐ」という使命に加え、生活を便利に豊かにするために、社会を「リード」していくことも、私共の大きな使命であります。

2020 東京オリンピックは残念ながら延期となりましたが、2025 大阪万博含め、大きな国際的なイベントが控えています。NTT 西日本 国際室は、これからもNTTグループやパートナー企業の皆様と共に、活動を続けてまいります。

今般の世界規模での厳しい状況から一日も早い終息を心から祈るばかりです。このような状況でありますので体調にはくれぐれもお気をつけください。会員の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈りいたします。

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/>

徒然日記(9)

当会特別顧問 石井 孝

「分かってほしい」

働く人の幸せ、働く人のモチベーションは、その会社のトップの姿勢次第でしょう。トップがIT（ソフトウェア）の必要性、重要性を真に認識して居なければ、結局は駄目です。

私は真藤恒社長の下で、まるきりど素人の集団（私もど素人でした）を率いて通信ソフトウェアの内製化に取り組みましたが、トップのソフトウェアに対する深い見識に基づいた、厳しくも情熱あふれる叱咤・激励を受け、予想以上に短期間でやり遂げる事が出来ました。

しかし、折角、苦勞して出来上がった部隊も真藤さんが去り、私も辞めると、瞬く間に雲散霧消してしまいました。

どんな仕事もそうかも知れませんが、特にソフトに関わる仕事は、修羅場にかかる昼夜を徹し寝食を忘れてやらなければなりません。そして仕上がった後、言い知れぬ充実感に満ちた職場にするためには、トップの情愛のようなものがそこはかたなく職場に伝わって来るようでない、この仕事は長続きしません。

現代に残った、極めて前近代的な側面を多分に持つ、極めて人間臭い仕事なのです。これを十分理解せず、経営者はコストのみに関心を寄せ、ソフト工学者は小難しい開発技法を興味の的としているように見えてなりません。

真藤さんのようなトップは、極めて特異なケースで、現下の経営者に、これからの技術の動向を的確に見通し、且つ人間性豊かな人物がどれ程居るのでしょうか。

些か難しい話かも知れませんが、マスコミの皆さんにはこの辺りを十分認識頂き、社会的指導者層にたいし、ITは我が国にとって、これから最も重要な産業分野の一つで、これをものに出来ない限り、我が国の将来は無いという事を、是非、強力且つ丁寧に啓蒙して欲しいと切に念願する次第です。

「童心」

「晴耕雨読」などと言うと如何にも格好がいいが、実は、何もやる事が無くなってしまったのでこんな事態に陥るのである。

小生の場合は、耕す土地も無く、おまけにリュウマチ気味なので「晴読雨読」になってしまう。

そんな訳で、今回は太宰治の「人間失格」と山手樹一郎の「浪人市場」を続けざまに読んでみた。

不条理、狂気そして絶望。如何にも辛気臭い人生よりは、人情と勧善懲悪、そしてハッピーエンドの筋を追うだけの話の方が肩もこらなくて面白い。

そう言えば子供の頃、海野十三の冒険小説や江戸川乱歩の「怪人二十面相」などに夢中になってわくわくしたものである。

老い耄れるという事は、どうも「童心」に帰るという事でもあるらしい。



「海野十三」

小生の投稿「童心」に関し、KK氏より大変興味深いコメントを頂戴しました。早速、「海野十三」の少年少女向けのSF小説ではなく、大人向けの「俘囚」「振動魔」「三人の双生児」を読んでみました。昭和初期に、既にこのような奇想天外な空想科学のSF小説があったとは意外でした。KK様、貴重なご教授、誠にありがとうございました。

「along」

この頃、ウィルス騒動で大変な北海道のニュースを聞く度に、学生当時の北海道出身の友人X君の事を思い起こす。

彼は非常に繊細な、よくできる人であった。しかし、如何したわけかよく分からなかったが、精神を病むようになり退学して地元に戻ってしまった。

帰る際に「俺はalongだ、学校を辞めるよ」と言った。「alongとは何事だ」と聞き返すと「モールス符号を調べてみるよ」と言われた。

Alongはモールス信号に直すと「・－　・－・・・　－　－　－　－　・　－　－　・」となり、これを和読すると「イカレタリ」になる。

なるほどと思ったが、神経が過敏になると、とんでもない予想もつかない事に気がつくものだと、余計に心配になった。

あれから半世紀以上もすぎた今、彼はどうしているだろう。

「イザベラ・バード」

コロナ騒動で逼塞する中で、全く偶々、イザベラ・バードの「日本奥地紀行」（高梨健吉訳平凡社）を読んだ。

明治11年の初夏、47歳の英国人女性イザベラ・バードが初めて来日し、当時、文明開化から遠く離れた東北地方を經由して北海道のアイヌ部落を、四か月近くかけて訪れるという、大胆不敵な冒険と探検の旅記である。

コロナ騒動で鬱屈する毎日の中で、何か一筋の光明を見出す想いがした。

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/>

JICAの動き

JICA 海外協力隊募集状況

事務局

JICA 海外協力隊の2020年春募集及び短期第1回募集については応募受付終了後、全世界的な新型コロナウイルス感染拡大の影響により、合格者の選考を中止しました。2020年秋募集(長期派遣)は2020年9月末～2020年10月末、2020年度第2回募集(短期派遣)は2020年8月を予定している模様です。※募集期間は変更になる可能性があります。

海外実践マネジメント

今も継続・拡大するフィリピンの Smart・PLDT プロジェクト(16)

— 『NTT を巡るグローバル環境の変化』 日米貿易摩擦、AT&T 分割・再編、
そして NTT のグローバル化へ —

元 PLDT チーフオペレーティングアドバイザー

元 NTT アメリカ社長

現 株式会社ハイホー CEO

鈴木 武人

8-4：逃避行

当時ホノルルから極東方面に出航する航空便は深夜から午前中に限られ、午後はハワイ周辺の島と本土行きに限られていました。

先ず、FBI が何時やってくるかもしれないので、旅行用トランクは捨て、身の回りの手提げだけにして、PTC 会場のヒルトンビレジの裏から出て、浜伝いで隣の Hale Koa Hotel(赤坂山王ホテルと同様の米軍人用保養施設)へ入り、これを素通りして、その玄関でタクシーを拾いました。マニラからの電話はひっきりなしですが、受話ボタンを押すと通話が始まる前にガチャガチャしたノイズが入るので盗聴されている様でした。

情報が必要なので携帯電話機は必須でしたが、通話の終了の度にタクシーを乗り換えました。それも一段落したところでワイキキから空港の反対方向の地元のスーパーマーケットで軽い食事をとり、携帯の電源を切って涼みながら時間をつぶし、飛行機の時間を見計らって今度は市内バスを利用して 22 時過ぎに空港へ入りました。空港には同僚が数人居り、彼等も情報を得て逃げ回った末、深夜のシドニー行の切符を購入する所でした。シドニーから、乗り継ぎで香港経由・マニラの計画でした。

小生はとっさの判断で、グループで一緒に行く事を避け、丁度バンクーバー行きのカナダ航空の機乗開始のアナウンスがあったので、座席に空きがある事をカウンタで確認、これを選択しました。同僚はカナダは米国と近すぎるので危険との意見もありましたが、空港での長居は禁物との考えで、一人だけカナダ行きを選択しました。米国は出国審査の無い国ですから、セキュリティチェックだけで出国できます。後は疑われない様ゆったり進んで機乗し、お休みです。

カナダ入国の際は多少緊張で、入国審査官が「何故の 1 晩だけの入国か？」の問いに、とっさに「無い筈は無い」との確信から「Vancouver Hospital に入院中の友人を見舞う」と答えて無事通過しました。後は深夜なので直ぐに空港ホテルを電話予約。レストランも閉じていたので空港売店で食料を調達しました。その際、サンドイッチしか残っていないが「Full or half?」と聞かれ、寝ぼけていたせいも、これだけは忘れもしない失敗のフルを 1 本(“Submarine Sandwich” = 長さがなんと 1m 近かった)買って、結局 3 食分になりました。なお、シドニーへ向かった人達は目的がハッキリしないとの事で入国が拒否され、空港ゲートの搭乗口で丸一日を過ごしたそうで、少なくともシャワーとベットでゆっくり出来たのはかなり恵まれていました。

8-5：事の真相

マニラに戻って真相が分かりました。これは比国内では通信業者に義務付けられている国際通信に関する料金・制度の内容が、米国からは『通信業者間で不法に料金を談合



して決めたとされて、反トラスト法(独占禁止法)違反、即ちカルテルによる不公正取引』と解釈されたという事です。フィリピンから逃走して AT&T に戻った米国人が訴えたのではないかとの推測もありました。NYSE に上場している PLDT の株価も敏感に反応していました。国際通信は基本的に発信者が全ての料金を支払いますが、この料金には発信側通信事業者の通信料金と着信側事業者の通信料金(米国等一部の国では移動通信での着信料金は着信者負担)が含まれます。比国のような開発途上国は先進国からの電話が多いので、比国の国際通信事業者は国内発信の料金収入よりも着信(海外)からの料金収入の方が多くなります。比国の通信規制では、国際通信事業者はこの着信料金を海外の通信業者から受け取る前提で、さらに着信側の市内通信業者や移動通信会社へこの収入の応分の配分をします。比国でも市内料金の値上げを含むリバランスの要請はあったものの、特にエストラーダ大統領の『貧乏な人の為の政策』により政治的に市内料金は無料とされ、また市内通信会社も数多く、市立、州立、会社や個人所有の通信会社があり、これらの会社にとってこの配分が経営にとって重要な収入でした。しかしながら、この制度は法律的には確立できても、技術的にはバイパスが可能です。

これに先立つ2年前、PLDT への国際呼が異様に少なくなり、経営上の危惧として報告された事がありました。我々の競争相手のグローブ社がその株主であるシンガポールテレコムからの呼を国際関門局をバイパスして、直接その国内市外局へ直接接続する事で、本来国内市内通信会社へ支払うべき義務を果さずに、割引で通信していたのが疑われましたが、証拠が掴めないとの事で Pangilinan 氏をはじめとする PLDT の執行役員会で悩んで居ました。この状況はシンガポールとの間だけでなく、いずれの国からの通信もシンガポール経由で安価に通信されている事が想定されました。そこで、その場で担当をシンガポールへ出張させ、PLDT の番号へ数回発信させ、そのタイミングでの PLDT の国内通信関門局(グローブとのインターフェース)の課金情報を収集、照合する事を指示しました。課金情報は発信情報を持ちますからグローブがバイパスに加担していた証拠となりました。本件はグローブに対しての貸しとして不問にしましたが、これを機に PLDT/Smart とグローブ社はお互いだけでなく、他の国際通信会社についても不正な国際呼の扱いをしていないかチェックするようになっていました。

今回は、グローブ側から「PLDT やグローブの国際関門局を経ずに、PLDT の子会社経由で直接グローブの交換機に国内呼として入ってくるものがある」との情報が寄せられたのです。調査の結果、以前米国の軍事基地で治外法権であり、現在は保税特区となっている米国空軍基地クラークと米国海軍基地スービックの跡地に、AT&T と PLDT の持ち分半々で同基地区域内だけに国際から市内までを扱う免許を持った電話会社が不正を行っていることが判明しました。

この会社が米国など幾つかの国の通信会社にフィリピンへの着信料金をディスカウトするとして呼を集め、これを国内扱いのコールとして国際関門局をバイパスして直接地元通信会社に配信していたのです。ディスカウトといっても国際着信料金を受け取りながら、国際着信に関する支払いを地元通信会社にしないのですから儲かります。親会社である我々にはその事実を報告せず、収益の一部を AT&T から派遣されていた米国人と現地の数人で山分けしていたのです。

8-6 : フィリピンの通信料金の制度

比国にとっては地方行政にも絡む通信の体系を壊す免許違反であり、関わった米国人と数人の比国人はここから横領した犯罪人です。この発見により基地区域外にコールを流していたマイクロウエーブや光ケーブルを急遽撤去させ、同時に関係者の処分を開始しようとなりました。しかしながら、調査の開始と共に米国人とその息のかかった職員数名は既に米国に逃走していた事が判明しました。

他への波及を避ける必要から穏便に済ませる必要があり、しかしながら収入の低減傾向に歯止めをかける必要があります。既にこれら基地は返還されており、米国利権が無くなっていたので、まず AT&T の持分株をその国際通信着信料金の未払い分と相殺して買収、100%子会社として要員交代を実施し、また地方の通信会社への支払いも済ませました。経営を正常に戻すためディスカウント料金を廃止、PLDT の正規着信料へ戻す(値上げ)検討を開始しました。

時の運輸通信大臣、NTC(国家通信委員会)長官ともこの方針の確認をし、比国の通信政策(競争導入)とこの方針は矛盾しないとの認識を得、またその実施のサポートも約してくれていました。2002 年から国際主要キャリアへの個別説明を開始、2004 年の PTC (環太平洋電気通信会議) の場を借りて正式に各国のキャリアへの了解を取付けるスケジュールで作業を開始しました。世界的な料金低減傾向の中での逆の動きですから、抵抗が大きかったのですが、説明内容は以下の様な国内問題でした。

フィリピンにおける市内料金は月間完全固定料金で所謂電話料金は無料、しかも月額 P250 から P350 程度の低廉に留まり、法的に国際、長距離、移動通信がこれをサブシディする事となっている。

①比国においても国際、長距離、市内の各料金間のリバランシングは計画されたものの、2002 年に大統領(エストラーダ=貧乏人の為の大統領を自称)判断として、特に市内通信は貧乏人に必要なサービスとして料金見直しは政治的に実施されない事となる。

②地方の電話会社は私的なもの、市立のものも含め、小さな電話会社で、その経営は厳しさを増しており、これを失くさない為には市内網へのサブシディ(費用補助)を続ける必要がある。

結果、世界中の事業者は個別割引(相対)の可能性を探りつつも、基本的には PLDT の決定に従わざるを得ないと言う立場を取ってくれました。が、特に AT&T は初めから反対、特別な個別の割引を求めて少しも譲らず、交渉には 1 年半を要しましたが、MCI 等競争者の同意の動きを見て遂に 2004 年 PTC で合意書に署名と言う段取りになりました。これは噂ですが、不法国際通信事業を行っていた職員が米国へ逃げ帰り、AT&T へ復職する為にフィリピンでしていた終端料金のディスカウント提供は正しい事であったと弁明して、その結果 AT&T の弁護士が司法省に入れ知恵したのではないかとの事です。

8-7: 米国司法省の影響

Subpoena を執行されたのは連絡が取れなかった PLDT/Smart の担当者数名と他の通信会社で合計 10 名程度でした。殆どはホノルル市内のホテルに内に留め置かれる代わりにホテル代無料、1 日あたり \$40 の手当付で、その後、人によっては帰国も許され、出頭の際は交通費も負担してくれるという扱いでした。しかしながら、FBI の担当官が高飛車で、犯罪者扱いをされているとかの不平がフィリピンの新聞記事に出てナショナリズムを煽っていました。

PLDT にとって NYC に上場し、多額の社債を発行している関係で米国の領土、施設(大使館等)に入れられない事は業務上非常に不便な事となりました。皆様御存じの様に日本の企業の幾つかもこの独占禁止法で高額の罰金やら和解金を支払っただけでなく、担当者や責任者が数年の懲役刑となってケースも種々あり、PLDT の株価にまで影響しました。

小生は 2004 年 5 月に、『もう十分だろう』の声を NTTCom の鈴木社長から得て、9 年を越えた比国勤務を終えて日本へ帰任しました。米国司法省から召還されている事も有ったのでしょう、役職は与えられず、謂わば待機のようなポジションで、フィリピンで実施した MVNO を NTTCom の事業として実施する提案、ビジネスプランを作ったりしていました。ところが、当時の NTT グループ内のポリティクスだったので、

『NTTComの最大顧客となっているNTTdocomoから顧客を奪うような事業はやるべきではない』との意見が出て、その時点での実施は見送られてしまいました。

小生が日本へ戻った事を知った米国司法省は複数回にわたり、今度是在日米国大使館からNTTへ弁護士を送り、小生の米国大使館への出頭を促して来ました。PLDTが契約してくれたワシントンの弁護士と相談の結果、『現在大使館に出頭してしまうと、米国に送られ、何ヵ月後に帰国できるか分からない状態。その状況では司法省にとって都合の良い情報だけを取られてしまう恐れが多い』という事でしたので、NTTに対して『業務として出頭しろと言うのであればそうするが、個人として休みを取って行くつもりは無い。』と告げ、『本人は協力したいが、会社のルールで不可能』との曖昧なスタンスを取りました。いわば時間稼ぎでした。結果、約1年後に結論がでました。すなわち、あっけなく、最高裁の判決は「米国には本件には司法権が無い」とされ、司法省の担当官はクビ、小生等は無罪放免となりました。

PLDTから日本に戻った約1年間は謂わばNTTComでの待機ポジションでした。無罪放免となって、前沢人事部長から申し訳ないが定期異動が固まった後なので、良いポジションが見つけれなかったとの言と共にNTTComの監査役を勧められました。社長はNTTData時代の戦友の様な石田守さんで、喜んでお受けすると伝えました。

8-8：政治的憶測・裏の話し、噂

911同時多発テロの後、ブッシュ大統領はアルカイダの殲滅に躍起となっていました。聞くところでは、当時比国ミンダナオの南西部の島にビン・ラデンの弟家族が住み始めて武装集団を作っていたとかで、ブッシュ大統領がその退治に米軍を入れようとしていたそうです。フィリピンの近代の歴史で、英雄アギナルド等が400年にわたったスペインからの独立をなす為、米国の協力を約束されて米軍の上陸を助け、独立を果しかけたタイミングで米西戦争の結果、米国がスペインからフィリピンを得たとして米国が再度植民地としてしまいました。そのため米国からの独立をしようとした際に20万人も殺害され、結果100年にわたって植民地化されてきたというフィリピン人なら誰でも知っている歴史があります。その後太平洋戦争の終盤で日本軍壊滅のために米軍は全土に無差別爆撃を行って100万人規模の民間人を殺害したとされ、その事から米国に対して良い感情を持って居る訳ではありません。そのような中でブッシュ政権はアロヨ大統領と密な連絡を持って、隠密裏に目的を果そうとした中、多分駐米大使の働きかけもあったのかも知れませんが、本件は一時的にもせよ米軍を入れるための幾つかの条件、即ち両国の懸案事項の中の一つとされて解決に至った、とかの話しを聞きました。真偽の程は判りません。

翌年、Pangilinan氏が渡米して、「全く問題なかった」との連絡をもらい、小生もその後所用で何度か米国に参りましたが、最初に入国した際、カルフォルニアの入国審査官が画面を見つめた後、やけに威勢よく『Welcome Back!』といわれたのを忘れられません。(次号に続く)

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外実践マネジメント/>

現金に始まり現金に終わる

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智



コロナ禍であり、倒産や世をはかなんで自殺という記事が毎日のようである。「経営は現金に始まり、現金に終わる」と言われるが何も経営だけではない。家計でも、国家でも個人でも同じだ。

日本の場合、中小企業は数では99.7%、人口では70%以上だ。経営者の最も大事な業務は資金繰りである。ベンチャーでも、設立はしたものの、創業者が製品の売込みに専念できず資金繰りに追われるという話はここかしこで聴く話である。

資金繰りで一番苦労したのはガーナ郵電公社の財務担当副総裁の時だった。とにかく、給料日に給料が払えない。組合と約束したボーナスはまさに空手形だ。給料日は毎月20日だが、近づくと胃が痛みだす。電話料金の請求書を発行しても、収納率はなんと25%である。ここでは、督促という営業上重要だが一番いやなことをする文化は存在しなかった。それと、だいたい宛名が非現行で段ボール一杯戻りが来る。まず、試験カードをベースに宛名の現行化から始めた。さらに、請求書は、自前の料金局など無く、民間の計算センターに委託していたのは良いが、催促しないと他社を先行させられて、後回しになる。やくざまがいの“脅し”をかけることになる。”脅し“は督促に出かけて行った時も同じだ。

「払わないと電話線を切るぞ」と脅して、実際バシバシ切った。ところが、ある時不払いの独裁者のオフィスの電話も切って、危うく総裁の首が飛びそうになった。

請求書の発行作業や督促作業が軌道に乗るまで、労働組合や業者は追いかけてくるし、何度か「自殺」を思い立ったことがある。追いかけて、街に昼間逃げ出し、夕方そっと戻ったりした。これはなかなか、資金繰りで苦しんだ人間でないと分からない。

最終的には、25%の収納率を95%にまで上昇させた。給料は給料日に、ボーナスは協約通りに支払えた。当たり前だが、経営は当たりのことを当たり前にするのが最も大事なのだ。しまいには、評判を聞きつけて電力公社の収納率の向上の手助けまでやり、ガーナにしばらく残って、今度は電力公社を立て直してくれと懇願されたが、マラリアにも罹患し、もう体力は限界であった。

日本の中小企業の経営にも携わったが、「現金保有が多すぎませんか」とよく指摘された。しかし、これに関しては、絶対に頑固に譲らなかった。何せ、アフリカでの苦い経験があったからだ。現在、コロナ禍の緊急事態宣言で、店の休業を余儀なくされ、倒産するケースがあるが、すべて現金保有額不足である。教科書的には、月商の1~3ヶ月が理想と言われるが、自分の場合年商分を常に銀行に預けてあった。借入金総額にも匹敵していて、よく「無借金経営ですね」と銀行からも言われた。つまりは、借入金をすべて返済してもまだ現金がある状態である。調達先も以前の4行から11行に増やしておいた。つまりは、パイプは多いにこしたことはないからだ。金利はバカみたいに安い。平均1%としても1億円を100万円で借りられるのだ。地獄を見た人間の知恵である。
(完)

吉村 昭と俳句の位置づけ

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智

「戦艦武蔵」、「零式戦闘機」、或は、「桜田門外の変」など近代日本の戦争ものや歴史小説でサラリーマンによく読まれる作家吉村 昭がエッセイストでありかつ俳人であったとは気が付かなかった。東京日暮里で生まれ、「東京の下町」というエッセイの中で余すところなく戦前の東京の下町の風情を活写しているのが見事で、自分も戦争直後の東京赤羽に育ったから、なあんだ、戦前と戦後は、断絶でなく連続しているなとつくづく感じ入る。

新潮文庫の「わたしの普段着」という氏のエッセイを読むと、常日頃からの文章作成上の悩みが相当緩和された。以前、新宿のカルチャーセンターで、小説作法という講座を受講したが、エッセイと小説のギャップ感が埋まるどころかますます増すばかりだった。

「わたしの普段着」末尾の作家・最相葉月さんの解説を読むと、一言で今日のテーマを言い切っている。「吉村昭の視点を読み解くための鍵は、究極の短編としての俳句に秘められているのではないかと思えてならない。」

俳句と短編がつながっているし、短編の長いのが長編だとすると俳句と長編はこれも連続していることになる。俳句はいわば、ある出発点としての視点である。

最相さんは、春夏秋冬の俳句を次のように挙げている。

- ・無人駅一時停車の花見かな
- ・巻かれたるデモの旗ありピアホール
- ・夕焼けの空に釣られし子ハゼかな
- ・冬帽の人は医者なり村の道

吉村氏と正岡子規との共通点もいくつかあるが、一つ目は、二人とも重い結核にかかっていた。ただ、子規は脊髄カリエスも併発していたのだが。そして、二つ目の共通項は、出身中学がいまの開成高校なのだ。氏の記述の中にこういうくだりがある。「母校である私立開成中学の前身は共立学校で、明治十七年卒の百五名の学生名の中に正岡子規の名がある。その年度の卒業生に、秋山真之、南方熊楠がいることに驚いた。」

三つめは、同じ日暮里に住んでいた。「さらに私が空襲時まで住んでいた家から子規が病没した、いわゆる子規庵は二百メートル」ほどの近さにある。

日暮里には私も縁がある。兄が開成中学・高校の出身で、文化祭でしばしば訪れた。それと、羽二重団子という江戸から続く老舗があり、子規も「仰臥漫録（ぎょうがまんろく）」という公表を意図せぬ病床記に「芋坂団子を買来ラシム」という記述がある。その団子屋は、吉村氏の生家のすぐ近くであった。その問題の団子屋だが、文政二年（1819）に植木職人だった沢野庄五郎が茶屋を開業し、往来の人々に団子を供したに始まるが、沢野家の子孫が、同じ職場の隣の席だった。よく、羽二重団子の自慢をしていたのを思い出す。

氏の小説の素材の掴み方は、「眼に生じたもの、耳にしたこと、書籍等の活字から触発される」という。俳句もエッセイも小説もそれは同じだと思う。手法でなく素材が命だ。（了）

原三溪（さんけい）と俳句

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智

笹鳴くや横笛堂の真木柱 明治から昭和初期にかけて活躍した実業家・原三溪の俳句である。東京ドーム4個分の敷地を持つ横浜・三溪園は、文字通り、三溪の創造物だが、趣向をこらした木造の日本建築の一つに“横笛庵”がある。この横笛庵、その名の所以は、800年前の平家物語までさかのぼる。

そこには、清盛の息子・平重盛の従者であった斉藤時頼と、建礼門院の雑仕女・横笛との悲恋が描かれているが、横笛が出家したのが、奈良法華寺であり、その法華寺には、「横笛堂」という瓦葺きの小さなお堂があり、横笛像が安置されているという。かつては、三溪園にもその後失われた横笛像があった。

明治27年にベストセラーとなった高山樗牛の「滝口入道」の影響で、横笛は一大ブームとなり、それにあやかって三溪も横笛庵を建立したと思われる。私が、三溪園を訪れ、確かに横笛庵を見たときはそのあたりの歴史的背景もわからず、単なる古民家の一つぐらいの認識しかなかった。その古民家群、飛騨高山から匠を呼び寄せ、百年たっても一分の狂いも生じない精巧な建築物を現代に残した。

原三溪の、恵まれた文才の背景には、国文学者で歌人の佐々木信綱が、原家の短歌の指導者で家庭教師でもあったということもあるようだ。実業家にもいろいろなタイプがあるが、「コレクター」「茶人」「パトロン」「アーティスト」と様々な側面を持つ人物は少ない（2019. 7. 13日経新聞特集）。自身も絵筆を持ち、歌を詠む実業家は、まれだ。

岐阜の庄屋に生まれ、早稲田大学を卒業後、生糸業を営む横浜の実業家原善三郎の孫娘と結婚、家業の発展に努めた。生涯、5、000点ほどのコレクションを築いた。茶人としても知られており、初代三井物産社長の益田孝らとの交遊もあった。パトロンとしても、横山大観、下村観山らを経済的に支援した。そこまでは、金持ちの道楽と受け取られても仕方がないが、自らも詩作をし、絵筆を握って多くの作品を残している。面白いことに、三溪は一度も日本から出たことはない。只、1916年（大正5年）には、インドの詩聖タゴールが来園、松風閣に逗留、詩「さまよえる鳥」を書いた。

対照的なのは、あの松方コレクションの松方幸次郎である。内閣総理大臣・松方正義の子である。東京大学に学び、エール大学で博士号も取得している。後、川崎造船の社長となった。財力にも恵まれ、当時3000万円（現300億円）ともいわれる購入資金で、文字通り膨大な絵画コレクションを買い求めた。ベルギー出身の画家、ブラングインやフランス人のヴェヴエールのアドバイスなどで3000点の西洋絵画や浮世絵8000点を収集したのである。買い方は実に豪胆で「ステッキでここからここまでの絵を全部」という買い方であったという。「絵の価値は自分には分からない」と言い、コレクターにあくまで徹し、アーティストの要素は全くなかった。この点が前述の原三溪とは異なっている。松方のコレクションは、戦災、火災で現在、日本、フランスに分散・所蔵されている。（了）

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外グラフィティ/>

海外便り

コートダジュール・リヴィエラ俳柳紀行(1)

元 JICA シニアボランティア
北垣 勝之

かんちゅうたび
寒中 旅 語る 機材やカタールエアー

ひとけ
人気 なき 観光名所訪れて

野暮爺もちっとはセレブになれるかな

この10年近く続けてきた欧州紀行、その大半はカタール航空に依存してきた。世界情勢や気象条件によって飛行ルートは都度変わる。今回の往路は北京→ウルムチ→アルマティ→シラス→ドーハ(トランジット)、そして再びイラン沿いに北上、トルコ黒海寄りに出て、イタリア北部を縦断してニースを目指す。帰路はピサから同コースをザグレブ→ソフィア→イスタンブールと逆に辿り一旦ドーハへ、その後はイラン、インドを横断、上海に出て成田に向かう。行きはゴビ砂漠の南部を、帰りは中央アジア南回りで、中東はサウジアラビアを避けた飛行ルートである。結構時間はかかるが燃油サーチャージ込みの恩恵に浴す安料金なので止むを得ない。

1月下旬、観光客の少ない頃合いを狙って欧州随一の避寒エリアを巡る。特にコートダジュールやリヴィエラと言った高級リゾート地を訪れることによって、日頃品性劣る蛮行爺も少しはお行儀がよくなるのではなかろうかと、淡い期待を抱きつつ折からの満月冴える成田を飛び立つ。第1句は五七五頭韻句。



ブロムナード 怨嗟忘れる 絶景かな

フランスの風に吹かれてテロリスト

ここで数年前トラック暴走テロ、犠牲者多数
(ニース・海岸通り)

金持ちも暴徒も本当はニースが大好きなのだ
(ニース城址下の岬)

虫けらや光りに弱きイルミネーション

博打うち夜に備えて仕込み中

カーニバル近し、観覧車も終日フル回転

日中のカジノは本番の準備に忙しい

(ニース・マセナ広場)

(カジノ・ド・モンテカルロ)

南仏に ^{つわもの}兵 ^などもが 生れの果て

コートダジュールニースに ^{はびこ}蔓延る 不動産屋

モナコの ^{しゅ}主 セレブ面した成金や

悪銭を集めて早し人の ^{せい}生

It's the place for scrooges, Côte d'Azur or Riviera, to show themselves.

一攫千金、傲慢金満家の集まるリゾート地、どこか張り子のバーチャル・ワールドに迷い込んだ気がする。豪華な館を構え、一流品のガゼットに囲まれ、ひねもす大金を振りかざし優雅に過ごす輩の巣窟、その右代表がコートダジュールのモナコであろう。ニースからマントンにかけて一帯は平地が少なく、海沿いの急斜面にへばり付く様に瀟洒な邸宅が建つ。海の眺望もよく気候も温暖だ。きっと理想の棲み処に違いなからう。だが待てよ、日常の生活はどうか、一歩家から出れば上り下り、狭い街路に車の駐車も儘ならない。年老いたら買物にも行けまい。よしんばお手伝いさんを雇って身の回りの世話をし貰うにしても、一日中崖っ淵の家中に引き籠っているには精神的にも肉体的にも退化するだけだ。健全な庶民には住みにくい場所である。モナコの富豪ならいざ知らず、一般人は旧市街のゲットーに慎ましく暮らす。そんなコートダジュールのリゾート地を求めて、セレブ欲の金持ちが大勢やって来るのか、ニースの不動産屋は繁盛し現地建設ラッシュは続くようだ。フランスはおろか米露をはじめ世界中の金持ちが別荘を構える。近代以降ここに住みついた実業家・政治家・芸術家は枚挙にいとまなし。けだし彼等係累の幾ばくかはコートダジュールやリヴィエラから次第に消えて行く。人間没すれば財も館もみな廃る。辛うじて芸術家の一部が後裔によって本人の名を冠した美術館や博物館を残す。悪銭身に付かず栄耀短し。第5句は英語俳柳、‘scrooge’は守銭奴の意。



カジノ前名前も知らぬ高級車
(モナコ・モンテカルロ地区)

ビールとソッカ、モナコ庶民の味がする
エジプト豆のお焼きはコートダジュール名物
(モナコ・アルム広場のフードコート)

ヨットハーバーの左奥に行けばグレース妃バラ園
(モナコ・フォンヴィエイユ地区)

大砲と砲弾並ぶ王宮前
冬季は閑散とした岩山上の大公宮殿
(モナコヴィル地区)

きら 煌びやかカジノブランドグランプリ

金持ちの余禄に寄生モナコ人 旧市街フードコート集う庶民かな

モナコはヴァチカンに次ぐ世界最小の独立国、面積約2km²、大公宮殿のあるモナコヴィル地区とカジノのあるモンテカルロ地区など6地区から成る。この代表2地区を歩き踏査するもフランスの都市と何ら変わらない。前者は高級リゾート地域らしく周囲には有名ブランド店がひしめく。贅を尽くしたカジノの本丸カジノ・ド・モナコを横目に、警備員にF1グランプリの模様を尋ねる。市街公道を猛烈なスピードで駆け抜けるカーレースのスリルを直感したければ5月にまた来いという。でも彼は「オレはその間サーキットよりカジノで大金稼ぎをするよ」と冗談を飛ばす。モンテカルロと言えばモナコではなく、コンピュータ・シミュレーション・モデルの事しか思い浮かばない。その確率統計が当地の賭博と結び付く。大金に当たるは千三つ(0.3%)の世界である。私がカジノに挑戦するとしたらラスベガス、何となれば50年前トントンの引き分けまで遊ばせてもらったから。それにホテル代が安い。ここモナコは敷居が高すぎて遊ぶには不適な場所である。

一方、モナコ大公宮殿は旧市街の静かな丘の上にある。ここから港を見下ろす眺望がすばらしい。城塞スタイルの宮殿は門前に衛兵の姿を留めるも辺りは閑散としている。

旧市街の市場を散策、その隣りのフードコートに立寄る。ここは観光客や地元庶民の熱気に包まれ活気に溢れている。ちょうど昼飯時、豆のピザ風お焼きを頬張りながらビールを飲んでいると、隣の席に陣取った孫娘二人連れのモナコ人爺婆が日本料理店に寿司を注文する。忙しそうな店主は日本人というだけの縁で私達には頼んでもいない枝豆の小皿をサービスしてくれた。隣席の爺婆は数年前日本に行ったことがある由、定番の東京・富士山・京都の話を持ち出す。そんな話のついでに、カジノの上がりでモナコは裕福ですねと言うと、彼等モナコ人はカジノに興ずることが禁じられていて、むしろモナコの外に出て遊ぶことになるそうだ。地元庶民はフードコートで各国の美味を喫食するのが楽しみの一つだという。実に堅実な生活をしている。

映画祭くだらんぶりのカンヌかな イベントで浮名を磨く有名地

2018年5月のカンヌ映画祭で是枝監督・(故)樹木希林主演の「万引き家族」がグランプリを得た。その表彰式が行われたパレ・デ・フェスティバル・エ・デ・コングレを訪れる。正面玄関の赤絨毯はそのままだ。早速、お上り爺婆は階段状の中ほどに立って記念写真、大賞にあやかる。でも映画の題名は気に入らない。せめて「ドン引き家族」程度にしておけばよかったのに。往々にして最近の映画は内容の良し悪しより、意表を突くタイトルで興味をそそる傾向がある。「万引き」による日本社会観の悪影響を危惧する。周囲の路傍には、往時の映画人たちの手形入りタイルがはめ込まれている。40、50もあるうか、でも私の記憶に残る手形は1枚もない。面白くも可笑しくもない、ただ映画祭のためだけにある街である。いずれにせよ、どこも彼処もイベント流行り、お祭りを作り上げて街勃興の起爆剤にせんと企む。気分を変えてカンヌの旧市街、市庁舎から西へなだらかな坂道を丘の上に出れば、港と湾全体を見下ろす絶景が待っていた。カモメたちが近寄る城址の縁に腰を下ろし、華やぐ街を一望しながらしばし小休止を楽しむ。

香水を産して招く山間地 香水で臭い汚い拭うかな

フランス社交界にとって香水は切っても切れない関係にある。その香水の原産地グラーヌに赴く。この町はカンヌ駅前からバスで小一時間、内陸の丘陵地にある。プロバンスからコートダジュールの一带にかけて、丘の上には小さな中世風城塞都市が無数存在する。俗に「鷲の巣村」と呼ばれ、外敵から守るための城壁で囲まれた中心には、教会はじめ生活のための施設が密集、狭い路地で結ばれている。グラーヌもそんな中世都市を彷彿とさせるような町である。ここは「香水の都」と称されるだけあって周囲の農園にはバラやラベンダーの植栽、街中には国際香水博物館や香水歴史工場がある。世界中の調香師の大半は当地の出身者と言うから驚きだ。でもこの町の歴史はむしろ市庁舎に隣接するノートルダム・デュ・ピュイ教会に見ることができる。当地出身の画家フラゴナールやルーベンスの面影を宿している。

そもそも香水の必要性は臭く汚いものから身を守るために生じたこと、華のパリも一昔前は汚水とゴミの山に埋もれていた。煌びやかに着飾った紳士淑女の社交界を演出するには必須不可欠の品だったに違いない。私も高温多湿のカンボジア時代には泥と汗にまみれ、しばしば香水のご厄介になったものである。夏は摂氏50度を超す中東ヨルダンでも汗臭消しの安い香水を時々購入したが、現地の気障な男どもにとっても必需品だったのだ。

ピカソ売りサービス ^{いずこ} 何処 に美術館

採算にあの手この手のミュウジウム

学芸員絵画市場の仕掛け人

マントンに驟雨が流すジャンコクトー

カンヌの手前、一寸したリゾート地アンティープにピカソの名を冠した美術館がある。かつて海辺の城だった建物に 1946 年から彼が住みつき創作活動をした場所で、例の幾何学的画法の作品が多数展示されている。駅からかなりの道のり、朝早かったので未だ開いていない観光案内所にねじり込み、地図をせしめて、地元人に尋ねながらようやく到達する。受付は無愛想でクローク使用の説明もない。入場料をふんだくり後は勝手に観て回れと言わんばかり。以前はあったはずのシニア割引も撤廃されている。幾つかピカソらしい絵の追認だけして早々に退出する。フランスのみならずイタリアにおいても美術館や博物館、名所旧跡への入場料は軒並み改悪され値上げしている。昨今、これら文化事業の運営が何処も厳しくなってきたのであろう。それだけにシニア優遇の施設に巡り合えると、旅の僥倖に思わず感激する次第である。本来、当たり外れはあっても狙った美術館や博物館は是が非でも訪れたいところである、マントンにあるジャン・コクトー美術館もそのつもりでいたが、現地に來たら突然の俄雨、やむなくレモン祭りの準備に活気づく街中を通り抜け、寄らずに撤退する。



ピカソの絵上手いか下手か主観的

ドン引きの我等もカンヌ・グランプリ

馬？犬？どっちかな、動物には違いない

ドンは貪、貧(ヒソ)とは違う。食欲は貧欲に通ず

(アンティープ・ピカソ美術館)

(パレ・デ・フェスティバル・デ・カンヌ)

ピカソさん行き着くところ漫画の祖

カモメには観光よりも団子かな

ノトリアスな変転画家、93 歳で没(1972 年)

旧市街丘上からカンヌビーチを見下ろす

(同左)

(カストル博物館)

南仏にバス乗り放題 1 ユーロ半

^{ちゅうちょう} 中長 距離シニア価格で列車移動

フランス域内の交通手段はバス移動が最適である。とにかく安い。マントンからニースまでの 100 番バスで約 1 時間 20 分、またカンヌ・グラス間の 600 番バスで片道約 1 時間の乗車も、普通バスは一律 1.5€/人である。これは有難い重宝な乗り物である。一方、フランス国鉄 SNCF も利用したが、ニース・カンヌ間往復で途中下車 OK のシニア運賃は一人 11€。バスの場合のほぼ倍額になるが、それは時間の正確性と乗り心地による差と割り切る。

仏・伊の交通運賃を比較してみると、他にトラムや地下鉄といった乗り物の違いはあるが、概してフランスの方が安い。やはり社会政策として公共交通の利便性を国民に広く浸透させてきた歴史の違いからくるものであろう。逆に言えば、国が安易に運賃値上げをすることは難しいと言えよう。やろうとすればストの憂目に会うはずだ。

バイオ女史車内講義や一時間

イタリアに学術立身なでしこ^{ばあ}婆

フランスからイタリアへ列車移動のとき、サンレモから乗り込んできた一人の日本人女性がいた。彼女は座席探しをしながら私たちを見つけ、「私は此処に座るわ」と言って連れのイタリア人男性と別れ家内の隣に腰を下ろす。対面式にテーブルを挟んで我々3人だけの会話が始まる。飛び入りの彼女は60歳前後か、寝屋川の出身で関西弁のイントネーションが残る。彼女曰く「私は今イタリアで微生物の研究をしています。数年前に亡くした夫について昔来伊、それが縁でイタリア人にバイオと医療の関係、薬に寄らない自然医学、酵素と免疫力、自然食品と栄養素など、人間と微生物の関係を追究しながら正しい生活習慣の唱道に努めているところです」。さらに日本のバイオ研究は今では世界の最先端にあると力説する。ご立派！そして彼女が下車するサヴォーナまで約一時間、私たちは彼女が繰り出すバイオの蘊蓄放射を浴びっぱなしになる。

その間、森下敬博士(血液生理学者でお茶の水クリニック院長&国際自然医学会会長で、病気はライフスタイル(食生活・環境・心)の乱れで発症すると主張、腸造血理論でも有名)、その他「細胞・酵素・遺伝子」の村上・小林両氏(筑波大)の学説や、千島(喜久雄)学説(赤血球が体細胞の母体であると説く生物学者)、安保徹氏(新潟大学教授(免疫学)、「見えない巨人」、「薬を止めたら病気は治る」で有名)等々、斯界の高名な学者先生や諸説の熱烈講釈を受ける。現在我々を取り巻く環境は危うく、健康体を維持するにはどうしたら良いか、大いに覚醒すべき時代に来ているという。その他、彼女は学校教育の日伊比較からイタリアの児童生徒の遅れも指摘する。話の途中で電話がかかってくる。それに対しても堪能なイタリア語でてきぱき対応、寸時たりとも休まない。大阪の家族と離れればしばしば単身来伊、能動的に研究活動をしているようだ。本名は伏せるが元は経済学の専攻、その後バイオ関係の伊語翻訳を通じて専門分野を開拓する。近い将来、彼女の研究成果が実ることを祈るのみ。

<事務局注>ご寄稿への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外便り/>

ウェブサロンの話、あれこれ

第1回海外情報ウェブサロン模様

事務局

第1回海外情報ウェブサロンが2020年5月5日(火)21時～22時、ウェブ会議室において開催された。テーマは「テレワークをしてみたら」であり、シンガポール、マレーシアからの参加や女性も参加し、ダイバーシティあふれるものであった。終了後は、オンライン飲み会を実施し、23時30分まで話が尽きないものとなった。

まず、初めてウェブ会議に参加する方に対して拍手・チャット等の基本機能を説明し、参加者全員が簡単に自己紹介した。次に、当会の松田幹事からテレワークの概要、実際、効果を説明し、テレワークの課題として、①セキュリティ対策、②サテライトオフィス勤務、在宅勤務での勤務管理、勤務評価、③生産性向上、④孤立性の回避などを挙げた。その上で、テレワークは今後定着するかという問題提起がなされ、多彩で活発な議論が行われた。

参加者からは、外出自粛の中、気分転換といくつかのヒントが得られたとの声があり、今後のウェブサロン継続開催に期待が寄せられた。今後開催する際はご案内いたしますので、多数の方々のご参加をいただければ幸いです。

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第92号を発行することができました。今回は新たにNTT西日本 技術革新部の坂井国際室長(当会顧問)から「NTT西日本 国際室の活動」のご寄稿をいただくとともに、徒然日記、海外実践マネジメント、海外グラフィティのご寄稿も継続していただき、また海外便りはコートダジュール・リヴィエラ俳柳紀行のご寄稿を始めていただき、誠にありがとうございます。

4月に緊急事態宣言が発令され、不要な外出を自粛する中、ICT関係者として気分転換と切磋琢磨の機会となるよう、5月5日、当会として初めて「海外情報ウェブサロン」を開催しました。テーマは「テレワークをしてみたら」であり、シンガポール、マレーシアからの参加や女性も参加し、ダイバーシティあふれるものでした。終了後は、オンライン飲み会も実施し、23時30分まで話が尽きないものとなりました。ご参加の皆様のご協力に感謝するとともに、次回開催の折は当会の皆様が多数ご参加いただければ幸いです。

皆様からのさらなるご寄稿をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

発行：ICT海外ボランティア会(ICTOV)

会報担当：空席のため募集中(編集長兼広報部長)、山川 博久(事務局長)

ホームページ担当：山崎 義行(報道部長)、安達 信男(幹事)